



放課後の子どもの居場所 日韓シンポジウム

今回は、育成財団と韓国の社団法人小さな愛を分かち合う会(ブスロギ)が共催した、「放課後の子どもの居場所 日韓シンポジウム」のレポートをお届けします。

平成22年2月27日(土) 13~17時

会場:東京ビッグサイト 助成:財団法人 日韓文化交流基金(日本) 協賛:SKテレコム(韓国)

これまで4回にわたってご紹介してきた「韓国の児童館事情」を、日本の関係者に具体的にお伝えすることを目的として、シンポジウムを開催しました。児童館関係者や研究者など、日本・韓国合わせて90名ほどが集まりました。

開会式

育成財団の鈴木一光常務と、ブスロギの金東玉(キム・ドンオク)理事長による開会挨拶を行い、「日本と韓国、両国の違いを超えて、子どもたちの幸せを目指していこう」と確認いたしました。また、金理事長からは、育成財団の10周年をお祝いするメッセージをいただきました。



▲多くの関係者にお集まりいただきました

基調報告

「韓国の放課後児童支援」と題して、朴 珠鉉先生(東京家政大学)にレポートしていただきました。

前提として、韓国の社会的背景から見てくる子ども・家庭への影響、そして、そこにある子どもたちへの教育に対する過熱さをお話いただきました。少子化、受験過熱、経済や教育の格差、貧困問題など、日韓の相違点・共通点を明確化することができました。

韓国の子どもたちの放課後対策は、これまでご紹介してきた地域児童センター事業だけではなく、日本同様に多様なメニューがあります。福祉系の部門が担当している地域児童センターや保育施設の放課後教室、教育系の部門が担当している学校内の放課後教室、青少年放課後アカデミーなどの施策を紹介していただきました。特に格差や貧困の問題に対してのサービスが多様であることがわかりました。

課題としては、①施設運営の分散問題②財政問題③プログラムの開発と普及④専門人材の確保⑤地域社会との連携一が挙げられ、まさに日本の児童館とも共通するものと感じました。

シンポジウム

- パネリスト :イ・ギョンリム氏(ブスロギ代表)
- ◆ ソン・イン氏(ブスロギ1318HappyZoneプロジェクト 部長)
- ◆ 堀添雄二氏(台東区社会福祉事業団 今戸児童館 児童厚生員)
- コメントーター:相馬直子氏(横浜国立大学大学院国際社会科学部 准教授)
- コーディネーター:依田秀任(育成財団 事務局次長)

地域児童センターの活動をイ氏に、思春期児童対応型施設「1318HappyZone」についてソン氏にプレゼンテーションしていただきました。この連載でもお伝えしてきたところですが、具体的な展開方法や課題などを実際に担当しているお二人にお話いただくこと

で、理解を深めることができたのではないかと思います。

日本の児童館からは、堀添氏に登壇していただきました。台東区の下町の児童館での運営から見てくる子ども・家庭の課題をご紹介いただき、また児童館がその中でどのような役割を果たしているかを解説していただきました。特に、0~18歳の児童を継続的に見ることができることなど、児童館の有効性を韓国側の参加者にもお知らせできました。

両国のプレゼンテーションの後に、相馬氏から課題を整理していただきました。事業の差異の確認、政策課題の相違点、日本の児童館が今後検討しなくてはならない課題についてもご指摘をいただきました。

通訳を介してのディスカッションとなり、難しい面もありましたが、じっくりとプレゼンテーションを聞くことができ、実のある会となりました。

歓迎交流会

札幌から沖縄までの参加者と韓国メンバーが、食事をとりながらの交流となりました。会場には料理とともに、日本の伝承遊びのおもちゃなどを持ち込みました。おはじき、紙相撲、お手玉、けん玉、南京玉すだれ……。盛り上がったのは、日韓手遊び歌合戦(意外にも同じ歌を使って、遊んでるんですよ)と、けん玉大会! やはり、子どもに関わる者は国が違って同じですね。すぐに遊びでつながれることを再認識しました。

「次はソウルで!」の声も上がりながら、またの再会を祈って会を閉じました。

来日したブスロギスタッフ23名の皆さんは、このシンポジウムの前日には、東京都墨田区の興望館にて「日韓遊びワークショップ」を、また前後に東京都内の2つの児童館を視察しました。シンポジウムなどの開催にあたり、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

今回の配付資料を、当財団ホームページ<http://www.jidoukan.or.jp/kr/>でご紹介していく予定です。



▲イ氏(左)とソン氏



▲シンポジウムの様子



▲けん玉大会は大いに盛り上がりしました